

駿河湾の深海魚（9）
キュウリエソ（その2）
久保田 正・佐藤 武

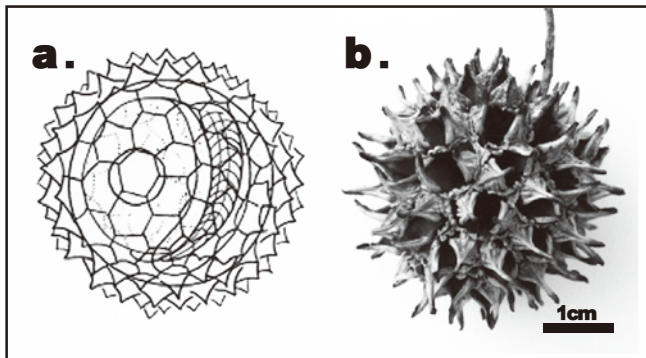


図 1. a. キュウリエソの卵，卵径：1.3～1.8mm
（水戸，1966 から引用）
b. キュウリエソの卵と似ているモミジバフウの果実
（焼津市内の街路樹から）

キュウリエソは、体長 70mm 位まで成長し、中・深層性魚類の汎世界分布の一種として知られています。本種の卵は、浮遊性でその形状は極めて特徴的です。卵膜の表面にゼラチン質の金平糖状の外被（突起）があります。このような形と正六角形の模様があるのは多くの魚類の中でも本種独特のものであり、他の魚類の卵との識別が容易で外被層を含めての直径が 1.3～1.8mm です（図 1a）。この特徴のある卵は、長い間「マクルラス卵」と呼ばれてソコダラ科に属する魚類のある種の卵と考えられていました。またこの卵の形状は、街路樹として知られるモミジバフウの種子を放出した後の果実と良く似ていますので紹介します（図 1b）。

日本海の本種は、周年にわたり昼間は水深 100～250m に分布し、夜間には 50～200m 位まで上昇し、日周鉛直移動を行なっています。このように日本海産の本種の形態や生態的な特徴は、駿河湾産の本種と大きな差はないと思われます。駿河湾産の本種の食性についての知見は皆無です。今後の研究に期待するところですが、ここでは他の海域からの研究結果について紹介します。まず、日本海で夜間に採集した個体ではカイアシ類、枝角類、オキアミ類、端脚類、介形類、十脚類など 13 生物群が捕食され、どの季節にもカイアシ類が優先しており、特に秋季になって種類数が多くなり、次いでツノナシオキアミ (*Euphausia pacifica*) が周年捕食され

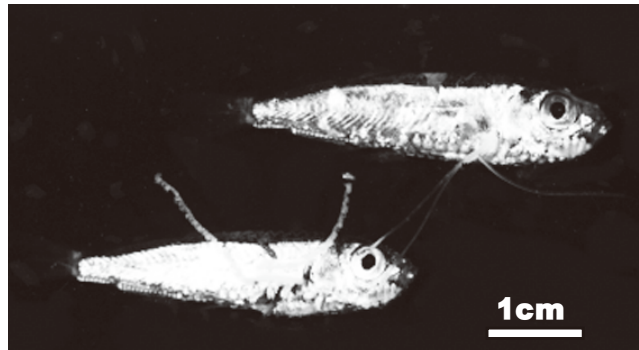


図 2. キュウリエソの胸鰭付近に付着している寄生物
2003 年 12 月 24 日 三保海岸打ち上げ

ていました。

次に太平洋側の東北沿岸域で昼間底引き網で採集した体長 40mm 以上とそれ以下の個体で比較したところ、40mm 以下では多くのカイアシ類が個体数、頻度、重量ともに優先し、40mm 以上ではカイアシ類や他の甲殻類プランクトンよりもツノナシオキアミが優先していました。このように他の中・深層性魚類と同じように甲殻類プランクトンを主体にしており、体長が大きいほど餌生物の種類数が多いことや大きい個体を多く捕食しているのは、どの海域でも同じ傾向でした。

本種は、日本海ではカラフトマス、マサバ、ニギス、スケトウダラ、ハタハタ、ゲンゲ類、カレイ類、スルメイカなど非常に多くの有用水族の餌料となっています。また、イギリス近海の大西洋域ではマイルカの重要な餌生物として知られています。

終わりに駿河湾に話を戻します。前報(第43号、p.9)で紹介したように本種が冬季に三保海岸にまとまって打ち上げられたことがあり、特に注目すべきことは右の胸鰭付近に甲殻類の寄生物が体の一部を外部に出して付着していた個体が多かったことです。その付着部位を詳しく観ると、右体側発光器の第2と第3 (OV₂～OV₃) の間の上部付近にあり、調査した 217 個体の約 88% の高い割合でした（図 2）。これら両種間の生態学的な意義は、今後の研究に期待したいと思います。